

Title	国民主義の研究
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.3 (1917. 3) ,p.377(59)- 382(64)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170301-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

命を研究するに方つて此著に負う所の少なからざりし次第を告白して、博士に感謝せねばならぬ。夫れから博士が歴史家として動かす可からざる地位を確立したのは、一九〇二年に上梓せられた *The Life of Napoleon* 二冊である。拿破翁研究の今尙如何に盛んなるかは、彼に關する著作の目録だけでも數冊を成すと云ふのにもても之を察する事が出来る。近代の著作中にもスロトン、フールニエ、ローズベリー卿等の好著あれども、博士の拿破翁傳が其の考證の精確で敘述の煩簡宜しさを得而かも行文の明快なる點に於て他の群著に一頭地を抜いて居ることは、史家の齊しく認むる所である。尙、故のアクトン卿の考案に成る *Cambridge Modern History* の第八、九兩卷(革命及び拿破翁の卷)中には博士の筆にかゝる章が少なくない。次に一九〇五年發行の *The Development of the European Nations 1870-1900* も最近世史の述作として有數

の書である。此書は普佛戰爭の戰略戰術並びに巴爾幹の歴史に於て精細である。今回の戰爭勃發後二冊を一冊に縮刷し、一九一四年の開戦まで増補せられたから、刻下必讀の書である。又一九一一年 *The Life of William Pitt* 二冊を發行した。既に拿破翁を研究し佛國革命を研究したる博士に取つて、其敵手方の大立者たるピットの研究は自然の順序である。ピット傳は即ち博士の拿破翁傳の副産物とも云ふ可きである。大英百科全書第十一版の拿破翁一世傳も博士の筆に成たものである。其他の著作には *The Rise of Democracy (1897)*; *Dunouriez and the Defence of England against Napoleon (1908)*; *the Personality of Napoleon (1912)* 等がある。夫れからマルタ島の歴史編纂主任ともなり、難解を以て有名なるカライールの佛國革命史に批評及び註釋を加へて出版した。博士は又 *the English Historical Review & Contemporary Review* 等の特別

寄書家である。

以上はローズ博士の著作の概観である。博士當年六十二歳、其學者的勞作の功果少なしとしないが、未だプロフエッサの地位を贏ち得るに至らず、オーマンやブユリーの諸先輩に比して寧ろ第二流として認められて居るやうであるけれど、史學者としての實力に於て、殊に佛國革命時代及び拿破翁時代の研究に於ては、英國の史學界に於て匹儔を見ざる學者であることは疑ふ可からざる所である。

『近世史上に於ける國民主義』は十回に亘る講演集であるが、其の第一講乃至第八講は一九一五年博士がケンブリッヂ大學々生に授けたもので、第九講と第十講とは同じ年バーミンガムとプリストルの歴史學會で夫れづつ講演したものである。本書の目的は即ち重なる歐洲國民の中に於ける國民主義 *Nationality* の種々なる表現を歴史的に叙説することに在るので、國民主義

其物を哲學的に研究することは、寧ろ従たる目的であつて、第八講に於て少し説明せられて居るのみである。博士が本書の序文に述べて居る如く、國民主義と云ふことが國民の自覺したる一定の運動となるに至たのは近世紀の事に屬する。マキャヴェリーの著述中に國民主義が茫漠と現はれては居るが、勿論本能的のもので決して自覺したる國民主義ではない。ジャンダークの愛國戰爭杯も決して國民主義と目す可きものはなかつた。はじめて國民主義—自覺したる國民主義的運動の勃興したるは一八〇八年西班牙人が拿破翁の壓制に反抗して蹶起したときである。當時拿破翁は西歐を席卷して意氣世界を呑み、懦弱なる西班牙王チャールス四世父子を脅嚇して王位を辭退せしめ、自分の兄ジョセフを之に代へたのである。かゝる國辱に憤激したる西班牙人は、佛國人を國境外に逐斥する迄は誓て干戈を捨てじと決心して、遂に其目的を達した

のである。即ち從來戦争と云へば、帝王將相の事として顧みなかつた國民は、茲にはじめて自家の力を用ひて自國を防衛せんとの自覺を發起したのである。後年普魯士國民を始め拿破翁の爲に其邦土を蹂躙せられた諸國民がライプツヒの大戦に勝利を獲たのは、一に西班牙人に倣うて國民的精神を喚起したる結果であつたのである。此意味からして、博士は一八〇八年を以て近世史の一新時期を劃す可きものと主張して居る。

博士は第一講 The Dawn of the National idea に於て古來の漠然たる國民主義を説述し、ダンテやチョーサー等の著作に準據して英國人や伊太利人の國民的精神を評釋し、尙百年戦争に於けるジャン・ダークの蹶起が佛國人の國民的精神を興奮せしめたる勢力の偉大であつたことを論じて居る。第二講の Vive la nation ではルッソーの著作が佛國の國民主義を鼓吹するに與つ

て力あつたことを説明して、佛國大革命から拿破翁時代に至る佛國人の國民的運動を叙述して居る。第三講 Schiller and Fichte ではカント以來の獨逸近世哲學の同國民運動に與へたる影響を述べ、シラーの『ウィルアム・テル』が拿破翁へ反抗の一大動機となつた次第から、フィフテが佛國軍に占領せられた伯林市中に立つて『獨逸國民に告ぐ』る有名なる愛國的講演の効果を説明して居る。第四、五、六講では西班牙人の愛國的勃興と、マッヂニーの青年伊太利黨運動と、スラーヴ族の覺醒とを夫れ々々説明して居る。第七講 The German theory of the state は現今の世界時局を了解する上に於て最も興味ある章である。先づ國の地位に因つて國家に對する觀念の相違ある次第から、ホーヘンツォーレルン家の諸王殊にフレデリック大王が自身を以て普魯士國家の體現としたることを説き、カント及びフィフテの國家觀を評し、ヘーゲルに至つて普魯士

の國家學説の完成したる事、ビスマークが實際政治に之を應用したる事、更らにトライチケに至りて普魯士の國家説が所謂 Realpolitik に偏して露骨なる侵略主義に墮落したる事等を説明して居る。

第八講 Nationality and Militarism は蓋し本書の骨子であらう。博士は歐羅巴の諸國民をは從來の如くケルト族、チュートン族、スラブ族其他に區別することは、發達したる今日の人種學上から見れば非科學的である。須らく之を(一)英國、北佛からフランス及び北部歐羅巴の平原スカンディネヴィア、芬蘭灣に亘る長身長髪の顔面立派なる人種、(二)中央佛蘭西、中央歐羅巴、巴爾幹半島等の大部分に棲息する普通 Alpine と呼ばるゝ巨頭の人種(三)北伊太利及巴爾幹半島以外の地中海北沿岸に住む地中海人種 Mediterranean race と區別す可きであると主張して居る。博士は尙國民性は必ずしも人種及び國

語のみを標準として區別す可きでない理由を説明して幾多の例證を舉げ、近年獨逸及び巴爾幹小邦等に唱道せらるゝ異人種と云へば一概に排斥せんとする偏狹で侵略的なる國民主義は、墮落したる國民主義であると評して居る。かくて博士は左の如く國民主義に説明を與へて居る。

I know of no words that better describe Nationality. It is an instinct, and cannot be exactly defined; it is the recognition as kinsmen of those who were deemed strangers; it is the apotheosis of family feeling, and begets a resolve never again to separate; it leads to the founding of a polity on a natural basis, independent of a monarch or a State, though not in any sense hostile to them; it is more than a political contract; it is a union of hearts, once made, never unmade.

These are the characteristics of Nationality in its highest form—a spiritual conception, unconquerable, indestructible. So soon as clans, tribes, or provinces catch the glow of this wider enthusiasm,

they form a nation. And thus it was that France burst into her new life. Her long Chrysalis stage, when patriotism clung about the old monarchy, was ended; and the nation stood erect and defiant, England, Italy, Illyria, Spain, Russia, Germany, successively felt the impact of this new vital force, and responded with messages, first of sympathy, then of distrust, finally of hostility. Thus, within twenty-five years, Europe was awake, and, became a camp of warring nations.

博士の國民主義に對する説明は此一節に概括せられて餘蘊はない。夫れから博士は日本の國民主義に就て少しく説及ぼして居るから、尋で乍ら左に其れを紹介する。

日本をして突然中世紀的國家から近世紀的國家に改造せしめ、其古來の武士道の力を損傷することなくして、歐洲文明の精粹を吸收せしめたのは、純乎たる日本人の愛國的精神である。朝鮮から露西亞を放逐し、山東省から獨逸を驅除し、而して現に軍需品を露西亞に

供給して聯合諸國を忠實に援助しつゝあるのも、畢竟痛切なる國民的名譽の觀念からである。然も半世紀に足らざる前まで弓矢を以て戦ひ、假面を蒙りて敵を嚇せし人民によつて此の如き偉業は遂げられたのである。これは實に一個の傳奇小説である。而かも其傳奇小説の真髓は、國民的生活の有ゆる崇高なる部分の體現として天皇に對する忠義と相待つて、日本人の上下を一貫する強き愛國心である。日本は實に恐ろしい貧乏國である。然し日本人には「戦はんにも國を有たない」との哀聲は殆ど夢想だもせられない所である。博士は尙同章に於て軍國主義の起原から、其れが一八六〇年普魯士王ウァルラム一世に依て復興せられ、現今のカイゼルに及んだ次第を説明して居る。第九講 Nationalism since 1885 と第十講 Internationalism は編輯締切迫して閱讀の邊を得なかつたから、何れ他日を期して紹介することあらう。

英國社會運動史に就て(二完)

小泉 信三

前號に於て余は近代英國社會運動發展の極めて大略を描くと同時に之に關する參考書十數を擧げ、其中の一たるシドニー・ウェブの近業『Towards social Democracy? 1916』の要旨を本號に於て紹介す可き事を約したり今之をなす事左の如し

二

一八四八年ペロンネット・トムソンなる人ラシカシアアのポルトン市街上の所見を筆に寫し其住民が如何に貧賤困窮の淵に沈淪して而かも全く奮發心なく手を己れに加ふるものは實に上帝にして地主には非ずと觀念するものゝ如く手を拱して運命に甘じつゝあるかの狀を描けり。今之を取りて今日のポルトン市民と比較せよ。固より二十世紀のポルトンに於ても貧窮者全く

之なしと云ふ可らず、而かも少くも全體として之を見れば此市住民は繁榮を樂しみ健康にして知力に富み、充分の休日を取り自主自恃の念旺盛なりと評する事を得可し。之れ實に一大變化なり。此大變化は抑も何に由て生じたるか一言の説明なき能はざるなり。或は之が原因を自然科學の發達に求めんとするものあれども當らず、何となればトムソンがポルトン住民の窮狀を描くに先だつ五十年以來自然科學上の發見發明は既に盛に行はれつゝありしを以てなり。マチユアアト・ミルが凡ての自然科學上の發見機械の發明は毫末も勞働者階級の苦痛を輕うするとなかりき今後と雖も亦同様ならんと云へるは吾人の同意を禁じ難き所なり。科學上の發見機械の發明は其自身に於ては少しも勞働時間を短縮するの力なく亦少しも賃銀を引上げるの效なし。所詮一八四二年のポルトン紡績職工を化して二十世紀のポルトン紡績職工たらしめたるも